

学位論文題名

皇侃『論語義疏』の研究

学位論文内容の要旨

本論文は、魏晋南北朝期の『論語』解釈を集めて著した、梁の皇侃の『論語義疏』を対象として、書誌学・思想史の両面にわたる研究を行ったものである。

第一部「皇侃の生平と『論語義疏』の研究史」においては、まず第一章「皇侃の生平とその著作」では、皇侃の閔歴について、特にその師であった、梁の五経博士・賀場との関わりに着目して考察し、門閥貴族制度の埒外にあった皇侃が、梁武帝の儒学振興政策を背景として活躍したことを論じている。

第二章「『論語義疏』の盛行とその亡佚」では、中国においては一旦亡佚し、我国に残存していた写本の発見によって、我国においては江戸時代、中国においては清朝の時代に再び世に現れたという特異な経歴を有する『論語義疏』の書誌を論じ、中国における『論語義疏』の亡佚と、我国におけるその再発見の歴史について概括している。

第三章「『論語義疏』と朱熹『論語集注』」では、従来定論を見ない、南宋の大儒・朱熹が『論語義疏』を実見していたか否かについて論じている。すなわち申請者は、実見していたとする説の根拠である、朱熹の説と『論語義疏』の説が一致することについて、朱熹が北宋儒家の説を採用した結果であることを明らかにし、朱熹が使用したテキストと『論語義疏』のテキストには確かに経文の異同が存することを明らかにした上で、それにも関わらず朱熹が何も言及していないことから、朱熹は『論語義疏』を実見していなかったと考えるのが妥当であると結論している。

第四章「清朝末期における『論語義疏』研究—桂文燦『論語皇疏考証』について—」では、清朝末期の『論語義疏』研究の専著である、桂文燦『論語皇疏考証』を取上げ、その特徴として、『論語義疏』そのものの研究というよりは、それを一資料とした『論語』そのものに対する考証であること、極めて折衷的な傾向を示していること、いわゆる清朝考証学に対する強い信頼感に貫かれていること、後漢の大儒・鄭玄に対する崇敬の念が強く投影されていることを挙げている。

第二部「『論語義疏』と皇侃の思想」においては、『論語義疏』およびそこに表れた皇侃の思想について論じている。第一章「『論語義疏』の「聖人無哀楽」説について」では、『論語義疏』に

見える「聖人に哀楽無し」なる解釈に注目し、それが晋の郭象の聖人観に基づくことを論証している。また、聖人が無情であるという命題が、魏晉南北朝期のいわゆる清談に好んで取上げられた話柄であることを論じている。さらに、皇侃自身は聖人が無情であったとは考えていなかったことを明らかにし、また、『論語義疏』にこの解釈を採用したことについて、清談の盛行に伴って聖人無情説が常識的であったことと、皇侃自身の折衷的な態度にその理由があると結論している。

第二章「皇侃の教化論について」では、皇侃の教化論について考察し、その特徴として、聖人は衆人に同化して教化を行うとすること、衆人の器量に応じて教化が行われると考えること、真実でない仮言も含めた、様々な方法によって教化が行われるとする考え方があることを挙げている。そして、同化による教化は、郭象の思想に基づくが、郭象が生得の性が不変であると考え、学の価値を否定するのに対して、皇侃は性を変化するものと捉え、性をより上位に移行させるものとして学を位置づけていることを指摘している。また、衆人の器量に応じた教化が、仏教の対機説法の考え方に酷似し、仮言も含めた様々な方法による教化もまた、仏教、特に法華経の方便思想に基づくことを明らかにしている。しかし、方便がその最終目標を衆人が仏となることに置くのに対して、皇侃は、衆人が至り得るのは賢人の段階までであって、聖人には至り得ない点で異なっていると論じている。さらに、皇侃が、聖人である皇帝を、賢人である臣下が補助する政治形態を理想と考えていることを指摘し、皇侃の教化論は、梁武帝の学術振興政策に呼応して、門閥貴族制度のもとで不遇の状態にあった寒人層が、学問によって政治に参画することを理論的に擁護したものである旨を論証している。

第三章「『論語義疏』所引王弼『論語釈疑』について」では、『論語義疏』に引用された魏の王弼『論語釈疑』の佚文を通して、王弼の『論語』解釈の特質を考察している。具体的には、森羅万象の背後には統一的な理が存在し、その理を把握することによって森羅万象全てを把握することが可能だとの考え方や、儒家と道家との立場を老子の道によって統一せんとする意図などが読取られることを指摘している。

第三部「資料編」においては、皇侃ならびに『論語義疏』の思想を考察する上で重要と考えられる論文、「陳金木『皇侃之生平参証』訓注」および「湯用彤『魏晉玄学論稿』訳注」の訳出を試みている。

付録の「『論語義疏』所引旧説索引」は、『論語義疏』に引用された魏晉南北朝期の『論語』解釈に関わる索引である。また、「『論語義疏』テキストデータおよびホームページについて」「補助漢字マクロ ToSeiji について」「正字変換マクロ ToHojokanji について」は『論語義疏』の電子化テキストとそれを入力する際に作成したプログラム、および、それらをインターネットで公開するために作成したホームページについての解説である。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 伊 東 倫 厚
副 査 教 授 佐 藤 鍊 太 郎
副 査 教 授 須 藤 洋 一
副 査 助 教 授 川 合 安

学 位 論 文 題 名

皇侃『論語義疏』の研究

『論語義疏』は、同時代の『論語』解釈書のほとんど全てが中国本土において亡佚する中で、我国に残存していた写本の発見によって、我国においては江戸時代、中国においては清朝の時代に再び世に現れたという特異な経歴を有する。従って、魏晉南北朝期の經学を考察する上で、極めて高い価値を有するのであるが、逆にその特異な経歴が災いして、従来、『論語義疏』の研究は、書誌学や考証学的な側面に偏りがちであった。本論文は、かかる『論語義疏』研究の状況に鑑み、総合的に『論語義疏』ならびに、そこに表出された皇侃の思想の特質を明らかにしようとしたものと言える。

第一部「皇侃の生平と『論語義疏』の研究史」においては、第一章「皇侃の生平とその著作」では、従来知られることの少ない皇侃の閲歴を明らかにしており、特に梁の武帝の政策の中に、皇侃の学者としての活躍を位置づけた点が評価できる。

第二章「『論語義疏』の盛行とその亡佚」では、『論語義疏』の書誌学的を簡潔にまとめており、従来の研究を概観する意味で有益である。

第三章「『論語義疏』と朱熹『論語集注』」では、朱熹が『論語義疏』を実見していたか否かという問題を論じて、実見していなかったとの結論に達しているが、従来定論を見なかった問題に最終的な解決をもたらす論考であると期待される。

第四章「清朝末期における『論語義疏』研究—桂文燦『論語皇疏考証』について—」で、清朝末期の『論語義疏』研究の專著という、従来とりあげられることの少なかった資料に光を当て、その特質を明らかにした点が評価できる。

第二部「『論語義疏』と皇侃の思想」においては、第一章「『論語義疏』の「聖人無哀樂」説について」では、「聖人に哀樂無し」なる解釈について考察し、それが晋の思想家・郭象の聖人観お

よび、当時盛行した清談の影響であることを論証し、また、注釈制作における皇侃の折衷的態度を明らかにしている。また、第二章「皇侃の教化論について」では、皇侃の教化論について、郭象や仏教の教化観の影響があることを明らかにしている。これらは、従来書誌学的に研究されることが多かった『論語義疏』研究に、思想的な側面から新知見を加えるものである。

第三章「『論語義疏』所引王弼『論語釈疑』について」では、『論語義疏』に引用された佚文を利用して、魏の重要な思想家である王弼の『論語』解釈の特質を考察しており、魏晉南北朝期の思想研究に新しい方法を導入したものと評価できる。

第三部「資料編」において訳出された「陳金木『皇侃之生平参証』訓注」「湯用彤『魏晉玄学論稿』訳注」の両論文は、いずれも当該研究に対して重要な価値を有するものであり、特に湯用彤論文は、当該研究のみならず、広く魏晉南北朝期の思想研究に有益ものと考えられる。

付録「『論語義疏』所引旧説索引」は、『論語義疏』研究のための極めて重要な工具書である。また、「『論語義疏』テキストデータおよびホームページについて」「補助漢字マクロToSeijiについて」「正字変換マクロToHojokanjiについて」に解説されたごとく、申請者が『論語義疏』の電子化テキストおよび、データ入力支援のためのプログラムを作成し、それをインターネット上のホームページで公開したことは、将来の中国古典研究の方法論を先取りするものであり、研究者に大いに裨益するものと評価される。

本論文は従来、断片的に、あるいはもっぱら書誌学的関心より研究対象とされていたところの皇侃『論語義疏』に対して、清朝考証学や我国の先学の研究成果、および魏晉南北朝時代の思想の諸相を批判的に踏まえつつ、総合的に緻密な論考を加えた力作である。『論語義疏』に引かれている魏晉南北朝時代の思想家の所説については、本論文で取上げられている郭象・王弼等々の他、さらに検討可能なものが残されており、また、皇侃の思想と仏教思想の関わりについても、さらに多角的に考察すべき事柄も見受けられる。これら諸点は、申請者にとっての今後の研究課題と言えるであろうが、本論文は、『論語』解釈史研究はもとより、魏晉南北朝時代の思想史研究にとって大きな貢献をなすものと評価できる。

以上により、当審査委員会は、本論文の著者、福田忍氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に到達した。